教育研究所月報

540

平成21年（2009年）10月号

編集発行・横須賀市教育研究所／ 阿部優子
横須賀市久里浜6-14-3／ TEL（046）836-2443
〒239-0831 FAX（046）836-2445
URL.http://www.edu.city.yokosuka.kanagawa.jp
E-mail.admini@kenkyu.yknet.ed.jp

授業を省察する～学び合い、高め合う子どもを育てる教師力の向上～

◆今年の夏は天候が不順でした。蝉の鳴き始めが遅かったり、８月の中頃から秋の虫の声が聞こえたり、子どもたちは、いつもと違う夏に戸惑ったことでしょう。しかし、教師が学ぶ姿にはいつもの夏と同じ熱さがありました。夏休み期間中もサマースクールや部活動など学校の内外で行われる予定で、先生のスケジュール帳はすぐにいっぱいになりますが、夏季研修もその一角を占めます。各会場で熱心に学ぶ姿は、地味ですがプロの教師として不可欠な努力の姿です。各校では、そろそろ夏の研修の成果が出始めていることでしょう。

◆教員の使命の第一は、一人一人の児童生徒の成長とともに、人間性を高め、社会性を育んでいくことにあります。また、第二は、基礎的な学力や、科学・文化を学び創造する子どもを育てることにあります。これらはさまざまな教育活動を通して行っていくため、絶えずその足跡、実践を振り返り、実践上のさまざまな知識や技術などを向上させていくことになります。これにより、教師力を高めていくことができます。

◆教育研究所が、所管する研修の計画を立てる上で、最優先で充実を図ろうとしているものは日々の「授業」です。目の前の児童生徒のことをよく把握し、その理解に基づいて毎日地道に積み上げられる授業こそが、子どもに学力を付けるために重要であることは言うまでもありません。

特にこの点を重視して、今年度の初任者研修は、講師や指導主事による授業実践の録画ビデオを研修教材にして進める内容を取り入れています。一時間の授業を丁寧に振り返ること、省察することで見えてくることは多くあり、教師力を向上させるために、大変意義あることです。

昨年度に続き早稲田大学の小林宏己先生に関わっていただきました。小林先生ご自身の東京学芸大学附属小学校時代の授業ビデオとその授業の逐語記録を研修教材にして、授業を省察することの意義や授業中の教師の働きかけ、子どもの発言をつなぐことの大切さ、子ども同士の学び合いのすばらしさなど、教師力向上の核心に迫る多くのことを学びました。

ビデオには、教師経験10年目の小林先生が映っています。担任する２年生の学級での社会科の授業です。「路線バスにミラーはいくつあるか」という発問から始まった単元ですが、児童は一人一人意欲的に、実に楽しそうに学習しています。子どもの反応予測を含めよく考えられた計画、明確なねらい、教材の工夫、練られた発問、子どもの発言を取り上げてつなげる技など、初任者に限らず教員が見習うべき点の多い巧みな授業です。しかし小林先生は、「ダメなところがたくさん見えていやになる。でもこれがこの時点での私の姿。客観的に見ることで、課題がはっきりする。」と指摘します。

また、授業中の指示や発言のことばをそのまますべて記録した逐語記録からは、ビデオではとらえられなかった子どもの姿が見えました。授業中には気付かなかった子ども同士の学びがあったのです。よいと感じたことを伝え、受け止め、他の児童に広げていました。授業後に書かれた児童のノート記述も合わせると、よりはっきり学び合う姿が見えました。

授業力、教師力の向上に関して、「教師を長くやれば自然にうまくなる訳ではない。意識して取り組まない限り、向上は望めない。まざまざと現実を直視し、課題を見極めて、次に生かすことで前に進める。」との小林先生の言葉が心に残りました。

◆各校で授業研究が盛んに行われています。授業者は教材研究や指導案作成に時間をかけ、授業をデザインします。参観者も、子ども一人一人の思考や行動の推移を見逃さないよう真剣に臨み、児童生徒にとってよりよい授業を追究しています。

授業を省察し、授業の質を高める個人の努力と、それを授業研究という形で学年、学校で結集させることが、授業を改善し質を高めていくのです。

学び合い、高め合う子どもの姿のために、教師自身も自ら学び、高めていこうとする姿を見せたいものです。

（所長　阿部　優子）

この印刷物は、印刷用紙などの紙へのリサイクルに適した資材のみを使用しています。（用紙：Ａランク、インキ：Ａランク）

授業づくりへの挑戦

子どもたちの輝く瞳と共に

諏訪幼稚園　教諭　梶山 千弘

幼稚園教育には、健康・人間関係・環境・言葉・表現の５つの領域があり、自発的な活動としての遊びを中心とした総合的な活動が行われています。様々な遊びを通して学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事に関わろうとする気持ちや態度を育てるなど、生きる力の基礎の育成を目標としています。

本園では、７月に『親子で遊ぼう会』を設けています。この会を計画する中で、子どもたちは、春の運動会で創作ダンスを発表していたこともあって、「もっと踊りたい曲がある」「世界で一つしかないダンスを親子で作りたい」と言い出したのです。子どもたちの願いを尊重し、それまでの子どもたちの手作りの活動を踏まえ、保護者と共にダンスづくりに挑戦することにしました。

４つのグループに分かれ、決められた時間内で創作し、持ち寄りました。同じ目標に向かって取り組む親子の姿は、生き生きとしていました。そして創作した振りを見せ合い、教え合い、世界で一つしかないダンスが誕生したのです。この時の親子の達成感に満ちたうれしそうな顔、「やったぁ！」と歓喜にあふれた声、輝いた瞳がとても素敵でした。この活動は、クラスの宝物になりました。

このように、子どもたちの思いを大切にした手作りの活動を積み上げ、一人一人の活動の場をつくることで、それぞれが自信を持ち、次の活動への思いを膨らませ、協同的な遊びへと発展させていくことができると考えています。

子どもたちは、達成感や時に挫折感を味わうことで、また挑戦しようとする気持ちを強くします。自分らしさを十分に発揮し、多くの人々と活動する楽しさも、たくさん味わって欲しいと思います。

今後も、子どもたちの姿を的確にとらえ、意欲を見逃すことなく支援し、主体性や協同性といった小学校につながる生きる力の基礎を育むために、子どもたちの瞳が更に輝く活動づくりに取り組んでいきたいと思います。

「豊かな学びを実現する授業」をめざして

浦郷小学校　教諭　高橋ちほり

以前赴任していた学校では「子どもたちがいきいきと学ぶ授業づくり」のテーマのもとで、研究を進めていました。単級で少人数のクラスということや、児童の実態などをふまえながら、授業づくりを模索しました。例えば、小グループごとに地域内のその道の名人のお宅に伺い、直々に技を教えていただいたり、他校を訪問して同学年の児童と交流する機会をもったりしたことなどです。子どもたちは体験を通して考えを深め、まとめ、それを他者へと発信していきました。そんなエネルギッシュな姿を目の当たりにするたび、「豊かな学びを実現する授業づくり」の一歩として、子どもたちに付けたい力を見極め、積極的に単元開発をし、充実させていくことの大切さを再確認しました。

現任校では「個を大切にした授業の創造」を校内研究テーマに据え、特別支援教育の視点を生かしながら、通常の学級での一斉指導のあり方を探っています。そこで改めて気付いたことは、子どもたちにとって真に「わかる授業」とはどのようなものかということです。日頃の授業場面で、誰もが「何をどのように学ぶかがわかる、指示を理解し自発的に学習に参加できる」、そんな当たり前の姿（でも実は、これがとても難しいのですが―）を実現させたい。そのために教師には、学習の流れを明確化したり、視覚に訴える支援をしたり、動作・パターン化を取り入れたり、といった何気ない工夫が必要になります。

子どもたちが目を輝かせて学べるような単元開発をしていくこと、授業を進める上での教師としてのスキルを向上させていくこと。授業づくりにおいて、いずれもがとても大切な視点であることを、それぞれの研究から学びました。

子どもたちの豊かな学びを実現する授業をめざし、また、その振り返りを大切にしつつ、日々の研鑽に努めていきます。

夏季研修で学んだことを明日の授業に

今年は、全40講座に延べ3,668名の申し込みがあり、多くの先生方に参加をしていただきました。課業中では確保することが難しい時間を、積極的に研修に充てている先生方の気持ちが伝わってきました。

講座内容を紹介します。

◆新教育課程への準備を進める

今年度より移行期間が始まり、新教育課程実施に向けての準備が進められています。夏季大学では、教育課程の編成や改善事項の具体化について研修を行いました。

夏季大学
「言語活動の充実をどのように具体化するか」
講師　水戸部修治（文部科学省教科調査官）

言語活動の充実によって、各教科等のねらいを実現し、思考力・判断力・表現力を育成することが必要です。そのために学校全体で共通理解を図り、言語活動の質を高めることが求められます。

水戸部先生は、本題の実現に向けて、具体的な事例を交えて、話してくださいました。

その中からポイントを紹介します。

◇子どもが表現に至るまでに、どのような思考をしているか考えること

子どもの間違いには、その子どもなりの認識の過程があります。例えばローマ字の読み方について、「happa」は「はっぱ」と読みますが、「うれしい」と答えた子どもがいます。それは、「happa」という綴りが、文字情報として先に認識され、表現されたことによるものです。この表現過程を教師が考えることが大切なのです。

◇思考を促す発問や指示を具体化すること

話し合いの授業で教師がよく発する「交流しましょう」という言葉は、子どもにとって「何を交流することなのか」が明確になっていません。交流では、「結論を出す」「共通点を見つける」「相違点を見つける」「発想を広げる」など、様々な目的があります。

本時のねらいに即して、何のために活動をするのかを明らかにした発問や指示を行わなければならないのです。

◇学校内の共通理解を図ること

各教科で取り組む言語活動のリストアップとともに、ペア学習やグループ学習などの交流形態の明確化・重点化を行います。学校全体で言語活動の種類や特徴を明らかにすることは、共通理解を図るためには効果的なプロセスなのです。

以上、3点を挙げましたが、言語活動の充実を図ることは、子どもの思考過程に寄り添い、教師の授業改善につながることになるのです。

なお、講師のご厚意により本講座のDVDは、視聴が可能です。ご希望の方は、研修セクションまでご連絡ください。

◆授業づくりにいかす

音楽
「新学習指導要領に対応した『鑑賞の授業』のあり方について」
講師　粟飯原喜男（川越市立芳野小学校教諭）

粟飯原先生は、「鑑賞の授業のコツ」について実技を交えて、話してくださいました。

鑑賞の授業では、発問によって子どもたちにねらいを持たせて聴かせることと、ねらいを一つに絞ることが大切です。楽器の音色を知覚し、感受するためには、活動を工夫しながら繰り返し曲を聴かせることが指導のポイントになります。

つまり、音を「知覚し、感受する」ことをたくさん行い、子どもが音そのものから感じ、何かを知っていくことが重視されるということでした。

また、教師も音と一体となり、子どもとともに鑑賞をすることが必要なのだそうです。鑑賞中に子どもに表れる反応にうなずき、「先生はみている」というメッセージをどの子どもにも伝えることがよい授業の条件となります。

各講座には、参加者からたくさんの感想をいただき、先生方が、研修によって多くを学んだようすが伝わってきました。これらを日々の授業実践にいかしていただけることを願っています。

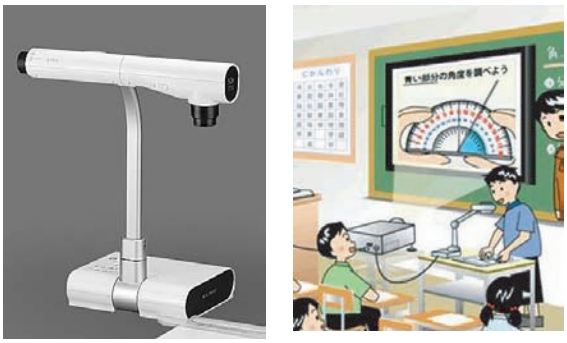
（指導主事　梅谷 尚子）

（研修セクション：TEL 834-9308）

◆ICT活用教育推進委員・夏季研修◆

ICT活用教育推進委員・夏季研修を８月７日、18日、19日の３日間にわたり、実施しました。

今年度は、PCルームに導入されている学習ソフトの紹介に加え、実物投影機を用いた授業づくりについても取り上げて実施しました。



実物投影機（左）と　その活用イメージ（右）

【8月7日】中学校対象

PCルームの学習支援ソフト「SkyMenu」の実習では、実際に先生に機器を操作してもらいながら、教材の配布や回収、アンケートなどの機能を紹介しました。これらの機能を用いれば、小テスト等を紙に印刷する必要がありません。

天体の学習に用いる「アストロジア」の紹介では、ソフトの制作者から直接、解説を聞くことができました。そして、天体シミュレータを使い、横須賀では天候不良のため観測できなかった日食の様子を再現したり、観測場所の設定を変えて皆既日食のシミュレーションをしたりしました。

このソフトを用いれば、夜間の校外学習に代用するなど、直接経験できない場面で活用することができます。

【8月18日・19日】小学校対象

「はっぴょう名人」「算数シミュレーション」などのソフトを紹介しましたが、中でも「問題データベース」に対しては、さっそく利用してみたいという声がたくさんあがりました。

「問題データベース」は全国学力状況調査に対応したプリントの作成や、日常の授業でも活用できるドリルプリント（5分程度で取り組むもの）、たしかめプリント（10分程度で取り組むもの）、実力テストなどをプリントアウトすることができるデータベースです。現在データベースには、小学校PCルームの先生機からアクセスできます。ぜひご利用ください。

また、３日間を通して行われた実物投影機を用いた体験型実践研修では、分度器や教科書、教師の手元の動きを投影するなど、授業での様々な活用方法について、お互いに意見交換しながら学び合いました。

研修資料は、各学校に一部ずつ配布しました。ご活用ください。

■連続コラム　　― ＳＡＢ資産の扱い方：10月 ―

◇『10月の行事』に関わって配慮が必要なことがら

■文化祭、展覧会、合唱祭

【SAB資産】プログラム、写真や動画像、出演者や来校者等の名簿、各種通信や文集など

【ポイント】・個人名が掲載されているものは終了後に廃棄するなど、適正な管理を行いましょう。
・作品やその複写物、録音記録などの知的財産権の保護に努めましょう。

■教育相談

【SAB資産】メモや記録、担任・養護教諭・保護者の間での共有情報、相談室への来室状況など

【ポイント】・個人情報を扱う時は、相談のために必要な最低限度のものにしましょう。
・児童生徒の指導に役立てるために個人情報を扱う事を、保護者と児童生徒本人に了解してもらうようにしましょう。

（指導主事　宇佐美 暁）
（教育の情報化推進セクション：TEL 837-1338）

理科センターだより

理科研修を授業にいかす
～Think Globally Act Localy～

８月４日に実施した「新指導要領における環境教育～アースシステム教育～」で、講師の国立教育政策研究所の五島総括研究官は「教師が地域の専門家になることは大切なことで、地域の実習では子どもたちは先生を尊敬する」と指摘しました。また、体験談では、グランドキャニオンを実際に見たとき、ご自身が研究していた三浦の地層に似ていると感じたそうです。「子どもたちは新しいものを見たとき、持っている知識や経験から判断する。知識や経験がなければ、どんなにそれがすばらしいものかということも感じることができない。」と話していました。教師は地域の専門家になり、子どもたちに多くの事象に出会わせることが必要です。

７月23日「海の生き物」は天神島臨海公園を会場に行いました。天神島自然教育園では漂着した自然物を自然のサイクルの中での分解に任せているそうです。海藻なども２週間もすればみごとに分解されるそうです。その分解された物質が植物たちの栄養となり、植生豊かな海岸を維持しているということです。自然には分解されない人工物だけを職員が収集して、自然の景観を損なわないように努めているということでした。話を聞くだけでもこの取り組みの大切さは分かるような気がしますが、実際に海岸に広がる新しい漂着物の量や、分解されて細かくなった以前の漂着物を比べたり、波打ち際まで広がる海岸植物を見たりすることで、生態系の循環を感じ取ることができました。

海岸での観察

７月31日の「昆虫」は、自然・人文博物館で行いました。休憩時間を利用して受講者自らが昆虫を採集し、実験室に持ち込み、観察を行いました。受講者の感想には「実際に虫を採りに行くという活動は子どもになったような気分でした。」とありました。子どもがどの様な気持ちで昆虫を採集し、どの様な興味を持って観察をするのか、実際に行ってみることで感じることができたのではないでしょうか。また、多種多様な昆虫も、からだの基本的な構成要素は変わらないことを、細部を観察することで納得することができました。昆虫を見る目が変わったと思います。

観察後、調査のためのマーキングをした

８月20日の「浦賀ドック科学教室」は浦賀ドックで大規模な実験を行いました。工場で使われていた動滑車を使い、20kgのおもりを軽く持ち上げることができることを体感しました。また約1200kgの軽トラックを持ち上げた時には、数cm持ち上げるために、ロープを何mも引かなくてはならないことや、動滑車もかなりの高さまで移動することがわかりました。工場の天井は動滑車を使うために高さが必要なのです。

動滑車を使い1200kgのトラックを持ち上げる

次に、ドックの10mの高さを利用してトリチェリの実験をしました。水を満たした24mのホースを、両端を樽の水の中に残して中心部を引き上げていくと10m程でホースの中の水は上がれなくなり、その上には真空に近い状態ができます。気圧によって水が押されているのですが、約10mで限界に達します。したがって満たされたドックの水をくみ出すには、ポンプも気圧を利用しているので、ドックの高さは10m以下であることが必要です。昔のドックの高さが10mなのはこのような理由があったということがわかります。

横須賀ならではの施設を活用することにより、子どもたちの科学の目を広げられるのではないでしょうか。

（指導主事　白井 宏一）

今月のお薦めの一冊

「教師花伝書
－専門家として成長するために－」
著者　：佐藤　学

平成19年度から20年度にかけて総合教育技術に連載された佐藤学氏のつづった文章、24編が一冊の本にまとられています。

「専門家として成長するために」「私の出会った教師たち」「教師として生きる」の３部から成り立っています。

世阿弥の「風姿花伝」の精神にのっとり、「教える専門家」であり「学びの専門家」である教師の秘伝書として書かれている大変興味深い一冊です。

（指導主事　北原 正子）

（調査研究セクション：TEL 836-6104）

【学校組織を考える】　馬堀小学校　校内研究への取り組み
その１　子どもの解釈・授業の事実をもとに、授業改善に取り組む

◆各学校では、校内研究が盛んに行われています。目指す子どもの姿や先生方の願いを凝縮した研究テーマも打ち出されていますが、実際に校内研究を進めていく上で、悩みや課題が少なからずあるものです。例えば、授業後の協議が深まらない、今後何をどうしていけばよいのか見えてこない、発表のための校内研究になってはいないか、学校として取り組んでいる良さが実感できないといった声を耳にすることがあります。校内研究の意義をどのようにとらえればよいのでしょうか。また、やりがいのあるものしていくにはどうしたらよいのでしょうか。

◆馬堀小学校は11クラス274人の中規模校です。ここ数年の研究の積み重ねを通して、研究会の持ち方やあり方について、その目的を全教員で共通認識し、柔軟にシステムの改良や工夫を重ねてきました。そして、今、授業研究が先生方のやる気と元気のもとになっているといいます。教員同士が授業を通して学び合い、一人一人の教員はもちろん学校としての力が高まる、やりがいのある授業研究のあり方とは、どのようなものなのでしょう。横田校長と研究推進委員長の山元先生にお話を伺いました。

◇校内研究は何のために？

「児童の変容をねらい、校内の職員が協力し合って取り組む研究であり、実践・協議を深める中でお互いの実践や考え方を理解し合い、教師自身も変容していくことを目指す」という共通理解があり、新しいメンバーが加わった年度当初にも再度確認されます。

◇まずは、その授業について知ろう！

低・中・高学年のブロックに分かれて指導案を検討した後、２回の拡大ブロック会を経て授業を行うようになりました。まず、見る側も授業づくりに関われるように授業者の願いを共有し、全員で授業について意見を交流していきます。さらに、授業の視点やねらいに迫るための手だてを丁寧に話し合うことにより、全員が当事者として研究に参加できるようにしています。

◇研究協議で大切にしていること

何より大切にしていることは、全員で見た子どもたちの姿から、どうして子どもたちがそのように反応したのか、自分の解釈をもとに話し合うことだといいます。年齢や経験年数、講師や指導主事という立場を超え、協議の視点を柱に、次々に意見が出され、子どもの姿をもとに授業を振り返ります。このことによって、学校として子どもたちを見る目を養うとともに、授業の理想の姿が見えてくるのです。

〈８月の校内研究風景〉

◇あなたにとって校内研究とは？

横田校長は「学校づくりの基本である」、山元先生は「子どもの姿を語れるので元気が出る」と話してくれました。取材を通して、馬堀小学校の校内研究は、授業における子どもの見方を学び合い、自分の幅を広げることを通して授業を改善していくという、教師本来の願いが実現される場、信頼関係にもとづく日常的な教師同士の学び合いの場の一部であることを強く感じました。

◆評価から省察へ

佐藤学氏が著書の「教師花伝書」で述べている、大変興味深い文章に出会いました。

―― なぜ私が授業を「評価」する見方から「省察」する見方の転換に、それほど多くの年月と観察の回数を費やさなければならなかったのだろうか。その最大の原因は「すぐれた授業」を追い求めていたからである。・・・学び上手な教師は、「評価」という枠を越えて、些細な事実をあるがままに観察し、そこにいくつもの「発見」と「驚き」を見出すことができる教師なのである。――

馬堀小学校の先生方は、授業を評価するのではなく、協力して子どもや授業の事実を見る目を養うことにより、授業改善に結びつける術を手に入れた、そこに学校として取り組む校内研究の価値を見出したといえるのではないでしょうか。

（指導主事　北原 正子）